

風景デザインレーター from 九州(第 20 号)

先週の 8 月 9 日は私の 56 回目の誕生日であり、連続の現地調査であったということで、この苦役から解放されたく、さぼりました。ということで、今回が、記念すべき 20 回目のレターです。

橋本治の「人はなぜ「美しい」がわかるか」を読みながら

【風景に感動するということ】

雲一つない青空を背景に、鎮座する赤と白に無理分けた鉄塔。その、輝くような姿に「何と美しい!」と思ってしまう。でも、ここで感動した美しさは、当然、街並みの美しさとは性格の異なる美しさです。あえて言えば、巨大な自然環境の中に存在する巨大な人工物を擬人化したすごさのようなもの。「美しさ」も味覚の「おいしさ」のように本物?のグルメもあれば、オムライスのような B 級グルメもあり、どちらもおいしいという点では共通しているが中身が全く異なることを、まとめて「おいしい」と表現しています。「美しい」も同様なものではというのは、これまで何度か書いてきたとおりです。

そして、今日紹介する本、橋本治の『人はなぜ「美しい」がわかるか』は、これまで紹介してきた「美しい」というものへの記述ではなく、人間が「美しい」ということをどのように感じ取っているのかということに触れたものです。

彼は、「美しい」が分かる人と、そうでない人がいるということから話をスタートさせます。また、「美しい」を体感的に理解していると、観念的に理解している人の区分も行い、観念的に理解しているということとは「美しいつもり」という次元で止まり、真の美しさを理解してはいないとしています。この違いを、清少納言の「枕草子」と、兼好法師の「徒然草」の比較ということで解説しますが、その

ことは省略します。

さて、20 回目を迎えた今回のレターは、「美しい風景」の原点に戻って、この「美しい」ということはどのようにわかるのかということ、「徒然草」風にだらだらと書いてみます。

まず、美しいということは、何度も書いてきたように「合理的である」ということであると最初に考えます。橋梁のデザインなど、物理的・構造的に合理的な設計がなされた橋梁は美しい。しかし、合理的でも、経済的に合理的な橋梁というのは、必ずしも美しいものにはならないとも思われます。それはなぜか。紹介する本の中でも、ものづくりに対して、かつては「簡単にものを作れる技術」がなく、きちんと時間をかけないとものそのものできない。そこに、試行錯誤の苦労や経験を積み到達する合理的な美しさ、以前話が出た柳宗悦の「民芸運動」のような素朴な美しさ、専門家集団としての職人芸的な美しさが生まれるという話を展開させます。しかし、現在は、「簡単にものを作れる技術」が存在するため、「美しいはず」「合理的であるはず」という観念がそのまま形になってしまったものに犯され、その結果、「美しくないもの」を氾濫させているということです。作れるものをつくってしまうのは、観念的であり、また合理的でもない、したがって美しくないということでしょう。

これは、私たち街づくりのデザ



イナー、技術者に対する痛切な批判であるとも受け取れます。しかし、彼の行っていることもよく理解できます。彼の言う観念的でない美しいものを求めるためにはどうすればいいのか、マニュアルや大学の教育のようなものは、すべてといっていいほど観念的なものだろうと考えられます。

私自身も、現場主義というよりは、頭の中で組み立てるのを好む性格があるため、この観念論的「美しさ」には、正直、相当に紛らわされているような気がします。

しかし、観念的ではだめというものの、実践的な「美しさ」の追求というものも、相当に怪しげなものではないかとも思われます。

例えば、「美しさ」の指し示すものは、時代時代の価値観によって当然、異なってきます。私には意味不明に見えた近代美術に関しても、その美の追求テーマを理解しようとする、かつての王侯貴族が集めてきた美術品に集約される「美」というものに対抗するという文化的な、あるいはイデオロギー的な背景があるということ、で、「美」の概念を変革することがモダンアートの果たす役割であるというようなことが言われていることを知ることができます。モダン

アートの美術家たちは、過去の美の否定という実践を通して美を理解、あるいは再構築しようとしているのですが、どうみても、それが美の姿だとは思えないものだらけです。

美の実践というものは、当然、時代の背景を抱えてながら行われているということ。昨日は、終戦記念日ですが、橋本氏は、1945年に終戦を迎え、それまでの「美しい」に対する評価の在り方は制度的に崩壊し、新たに「かっこいい」というようなずっとわかりやすく、かつ低俗的な評価に貶められざるを得ない状況になったとも書いています。石原裕次郎が起源といわれる「かっこいい」ということに置き換えさせられたということです。そして、それまでの「美しい行為」は、愚かな行為、愚かな考え方という転換を迫られ、「美しい姿勢」「美しい姿」ではなく、「かっこいい姿勢」「かっこいいスタイル」のように、より生物的で、欲望的な価値観が主流をなすようになったと批判します。

さてさて、実践的に行われている美の追求の現場は、このように混乱しています。これは、おそらく、「美」を一般論化するために引き起こす問題かもしれません。

以前、書いたように、景観デザイナーとしてのスタンスは、政治的なもので、「国民の安寧」ということになると書きましたが、同じようなことで、私たち建設技術者が、取るべきスタンスとしての「美」というものは、やはり、以前書いたように、「風景は、診断し、

病んでいるところを治療し、不良的なところを更生すること」という話に、同調するようなことであろうと考えます。もっと、露骨に、あるいは短絡的に書いてしまうと、結論的には次のようなものです。

「風景の美しさは、社会背景、歴史背景を背負った個人個人の経験的な価値観で異なるため、社会性のある美しい風景を創造するということは基本的には間違っている。いま、私たちがやろうとしているのは、もっと低次元の話で、美しい風景を作らないようにしましょう。美しい風景と感じる風景の姿への阻害要因を排除しよう」というものではないかということです。この意味では、電線や看板の問題を取り上げるのは、すごく妥当なものだと思いますが、それらの都市における装置的な要素については、その要素そのものを取り上げるのではなくて、風景の中における阻害要因として見るということが必要です。

もうひとつ理解したこととして、私たちが接する態度として、風景というあるいみ、感動体験につながる対象物に対して、批評家的な見方をすることでその本質を見失ってしまうのではないかという危惧も、この阻害要因を排除するというのが目的であれば、理にかなった見方ということになるものと考えられます。風景そのものを評価して創出するのではなく、その阻害要因に限って評価するのですから。

ただ、これが私たちの「美しさ」

に対する仕事のスタンスだとしても、評論家としてのスタンスだけでは、さびしいところがあります。また、「美しさ」そのものを感じ取ることができなければ、その阻害しているものも、観念的にしか評価できなくなるとも思われます。

また、やはり、一人の今の時代を生きていくひとりの人間として、感動する風景に出会いたいとも思っています。そのためには、「きちんと」仕事をしなければいけない、「きちんと」人生を生きなければいけない。この「きちんとする」ということで、美しさを理解することができる橋本氏は訴えかけます。彼は、こういう解釈をしています。『人一般は、「美しい」がわかるものであると考える。「美しい」とは、「存在する他者」を容認し肯定する言葉である』、また、『「美しい」とは、人本来の在り方』に関わるものである』と。

さて、いろいろと試行錯誤してきましたが、第20回のレターの締めくくりとしては、このような結論的な話ができたとということで、良ししたいと思います。

観念論的にものを見たがる自分ですが、この最後の橋本氏の言葉を嘔みしめながら、次回からは、これらの考えの基本に立って、いろいろの書籍の紹介を続けていきたいと思えます。

【続く】